



The Real Face

取材・文／竹中 聡(本誌) 撮影／エディオムラ

映画を撮るといふ役割は、
私が決めてるんじゃない気がする。

河瀬

かわせ・なおみ

直美

リを受賞した。京都みなみ会館での公開にあわせ、舞台挨拶に訪れた、監督・河瀬直美。「もともと、努力の人だと思っんです」。天才タイプか秀才タイプかで言うところの後者だと。「ふふふ」。静かに笑う彼女も、稀代の柔道家と同じような雰囲気をもっていた。

アナログ、デジタルは新旧でなく基本と応用、なのである

奈良に生まれ育った。「奈良って外から見ると、京都からちょっと奥に入った感じでしょうね。新幹線も通らへんし(笑)、入りにくいから、だから(街が)残ってるっていう(笑)」。舞台挨拶ではそんな話題に始まり、フィルムの話にも触れた。自身の作品は全てフィルムで撮影していて、アナログ、デジタルは新旧ではなく、基本と応用と捉えている。「コミックにはデッサンが怪しいキャラクターが登場し、ライブではとても聴けたものではないシンガーのCDが売れる...」

「テレビもそやし、そればっかりな気がする...」。

イージーなものが跋扈する時代、「そこ(フィルム)から始めないと。機械的なものから始めちゃうと、大事なものが解らないままものづくりに入るような気がする。ヴィデオインスタレーションとか、メディアとしてはあるけど、ものづくりの基本をやるには適していない気がするんですよ。自分が生きてる土台としてあるものを使って、実感してからでないよ。表面的な技術に収斂されていくと、それはオペレーターでしかないというか。それは考えが古いということではないですよ」と静かに、だが強く言う。

撮るべきものが決まった緊迫感
同じ獲物を皆が狙っているような

「殞の森」は、男女が森の中を彷徨うシーンが中心である。登場人物も、台詞も多いわけではないし、アクションがあるわけではない。だが不思議なドライブ感によって、

天才型か秀才型かで言うと、後者
カン又受賞監督の第一印象

7年前、シドニー五輪で金メダルを獲得し、母の遺影を掲げて表彰台に上った井上康生は、「戦う意味」ではなく、「勝つ意味」を知っていた。勝負という不確定要素でできた世界で、全ての摂理を超越し、確定要素を手にして、勝つべくして勝つたのではないか。憑きものがどうかではなく、戦う高揚感よりも、注視すべき一点が見えている静謐でニュートラルな表情。能動的に「迷いが無い」というのもなく、受動的に「導かれる」というのもない。達観したわけではなく、悟りきったわけでもなく、だが道筋が見えているような、不思議な表情...

先頃、カン又国際映画祭において、「殞の森(もがりのもり)」という作品がグランプリ

一気に抜けていく。陰影や濃淡といった、コントラストの利いた映像も、観る人間を飽きさせない一因であろう。

「今はフジもコダックも（フィルム特性という意味では）そんなに変わらないと思うんですよ。私が自分で撮っていた学生時代からは当然進化していて、そんなに差はないはずなんですけど、8ミリフィルムとHDVで撮ったとしても、光が入ってきた画を撮ったときの奥深さというか、ザラつき感は絶対フィルムの方が本物というか、ヴィデオのサラッとした感じとは違いますね。撮り手のスタンスが違うんですよ。対象との向き合い方が違うから、シャッターを押す瞬間の力とかが違う。撮れるものも違う」。

フォトグラファーがシャッターを切るときの、一撃必殺的な迫力を引き合いに出してみる。無論、映画は動画であるから一瞬ではないが、撮り直しを前提に撮る訳もなく、緊迫感と同じではないか。「うん。あの緊迫感は最高ですね。色んな国の言葉が現場で入り乱れていても、撮るべきものはひとつ。それを見つけたら緊迫感・集中力は楽しいですね。同じ獲物を皆で狙うような」。

生まれ育ち、染みついた奈良と記憶に残る、京都の言葉と人と

今作のロケーションも生まれ育った奈良。今まで見てきた景色の中で、慣れ親しんだ土地を越えるものはないのだろうか。

「越えるもの、綺麗な景色はナンボでもあると思いますけど、絵はが美的にしか撮

れない。そこには思い出がないから。あんまりものを知らないんです。自分の場所しか（笑）」。

映画を撮る場所、という制限を外せば、京都にも思い出はある。かつて七条で商いをしていた祖母は正しい京都弁を話す人で、週末に伏見の納屋町に奈良から買い物に訪れた。「祖父もそこへ行くのが好きだったんでしょね。祖母が買い物をする間、練り飴のおっちゃんがおつて、いつもウサギとかチヨチヨイってつくって来て、持って帰るのが楽しかった。色で言うって？セピアになるのかなあ…。匂いの方が記憶にあるかな。その商店街の匂い…。20歳ぐらいの頃は、デートで竜安寺とかも行きましたよ。京都の大学に行きたかったくらいだから。「関西」というより「京都」っていうカラーがしっかりあるんですよ。学生時代に映画をつくってた頃の仲間も京都のコが多くて、ロケもしょっちゅうしていて、『千本ラブ』とか解りますか？（笑） そのコが一歩仲良く、泊まりに行ったり。西陣の狭い狭い路地の、ホンマにガシャンガシャンって機械の音が聞こえるところに住んでるコもいたし。『どこ』という場所よりも、祖母の京都弁や、人についての記憶が深い」。

映画を撮るといふ役割は私が決めてるんじゃない気がする

映画を撮り続けることで、1000年先の人にも観てもらえる映画を撮りたい。「泣かせたい」「怒らせたい」「笑わせたい」という気持ちはない。観た人の反応は様々でいい。生涯に何本撮りたいという具体的な目標もない。一本一本、残るように撮っていきたくていいだけ。

「歴史に名前が残りたいんですよ。聖徳太子、みたいに（笑）。何故かは解らないですけど。何か：（自身が）奇跡的に生まれてきた気がするんですよ。『なんで生まれてきたんやろ？』というのをずっと考えてる。子供が生まれたので母としての役割はあると思うんですけど、たぶん、役割としては

ものをつくることなんですよ」。年を経れば、社会的な役割は増えていく。それは仕方がない。その中の、ライフワークとして映画がある。

映画の世界に入るまでは、バスケットボールに熱中していた。「映画なんて、奈良におつたら何も関係ないのに、特に何かキッカケがあるわけでもなく（映画の世界に）行ってしまった。バスケットは生涯はできないけど、映画ならできると言うくらい」。

インタビュー中、最も印象的だった「映画を撮るといふ役割は、私が決めてるんじゃない気がする」という言葉がこのときに出てきた。言葉ほどに受動的ではなく、かといって能動的でもない。文頭の話をするなら、河瀬直美は「撮る意味」ではなく「残す意味」を知っているということか。

1000年の後に残る河瀬作品が人の基本の感情に響きますように

「今、1000年前から学ぶことはいっぱいあって、きっと1000年後も今から学ぶことはいっぱいあると思うけど、根底にあるのは、人が生きていくってこういうことの基本の感情だと思ってるんですよ。好きになったり、恨んだりもそうだと思う。社会っていうのができていって、現象としてのものもあると思うけれど、個人の感情を大事にしなきゃいけない。いけないっていうよりは、そっちの方が大切、豊かかっていうことが伝わればなあ、と思ってる人間って、むっちゃ悪魔にもなるから。そうならたらの凄く争いにしかならない。反面、優しさもある。凄く生き物だなって」。

メディアは武器である。その映画が、人を殺すことだってできる。良し悪しは解らない。純粋な力として、他に影響を持つ力を持っている。メディアを担う者として、映画監督にもその力が与えられている。だからこそ、「天使VS悪魔」という序列があるならば「人以上」でありたいと思うし、伝えたい。「良かれと思って世に出したものが、曲解されるかもしれない。それで誰かが不幸になるかもしれない」。そんな風に疑い出すとキリがない。信じているものを、ブレなく出せば大丈夫。

「うん」と、また不思議な表情で頷く河瀬の作品を、1000年後、30007年に観た人は何を思うのだろうか。



河瀬 直美 かわけ・なおみ

奈良市生まれ。映画作家。中学からバスケットボールに夢中になり、高校在学中は国体にも出場。'89年大阪写真専門学校（現ビジュアルアーツ専門学校）映画科卒業。劇場映画デビュー作「萌の朱雀」で、'97年カンヌ国際映画祭カメラドール（新人監督賞）を史上最年少受賞。'07年「殯の森」がカンヌ国際映画祭でグランプリを受賞。単なるイベント・催事ではなく、「本物と本物の対話、プロフェッショナルな映画祭をやりたい」と、「なら国際映画祭」の実現へ向けて尽力中。去る10月10日には、監督作品であるドキュメンタリー映画「垂乳女」が、山形国際ドキュメンタリー映画祭で特別賞を受賞。

「殯の森」上映スケジュール <http://www.mogarinomori.com/>

- 11月10日～
布施ラインシネマ
ワーナー・マイカル・シネマズ西大和
ジストシネマ和歌山
- 11月17日～
樫原シネマアーク
- 11月27日～
滋賀会館シネマホール
- 12月15日～
シネマデプト有楽

